The Future of the Grey-faced Buzzard as Seen through from the International Sashiba (Grey-faced Buzzard) Summit Miyakojima

国際サシバサミット宮古島から見えるサシバの未来

台湾・長榮大學　特別招聘教授
久貝　勝盛

Abstract

The International Sashiba (Grey-faced Buzzard) Summit was held on October 16 and 17, 2021, hosted by Miyakojima City. The summit was originally scheduled to be held in October 2020, but was postponed for one year due to the Corona disaster. This year, the impact of the corona disaster was still very much in evidence, and after much deliberation, it was decided to hold the event on-line. After much deliberation, it was decided to hold the meeting on-line.

This was the first attempt to hold an on-line meeting, and there was much concern about whether or not it would go well.

However, it is easier to give birth than to worry, and somehow things went according to plan. However, we must not forget the dedicated efforts of Mr. Seiichi Dejima of the Nature Conservation Society of Japan and Mr. Hideaki Nagahama of the Environmental Health Division.

In addition to Ichikai-cho, Tochigi Prefecture, which is famous for its domestic breeding grounds, the summit was attended on-line by the chiefs of Uken-mura, Amami Oshima, Kagoshima Prefecture, which is a relay station and wintering ground, Taiwan (Pingtung County) , and the Philippines (Sanchezmira City) , among others.

After exchanging opinions, the "International Sashiba (Grey-faced Buzzard) Summit 2021 Miyakojima Declaration" was adopted to discuss future conservation activities and how to protect the environment of the Sashiba (Grey-faced Buzzard) flyway.

In this article, we will consider the future of the Sashiba (Grey-faced Buzzard) based on the activities presented by the participants at the International Sashiba (Grey-faced Buzzard) Summit.

はじめに

2021 年 10 月 16、17 日の２日間、宮古島市の主催する国際サシバサミットが開催された。当初、2020 年 10 月開催予定だったがコロナ禍で一年間延期になった。本年もまだまだコロナの影響が大きい。いろいろ議論の末 On-line で開催しようということになった。

On-line 会議は初めての試みで、うまくいくかどうか大変に心配されたが、案ずるよりは産むがやすしでどうにか計画通りに事は進んだ。しかし、この裏には日本自然保護協会の出島誠一氏と環境衛生課の長濱秀明氏の献身的な努力があったことを忘れてはならない。

今回のサミットは国内の繁殖地で有名な栃木県市貝町のほか、中継地や越冬地の鹿児島県奄美大島宇検村、台湾（屏東県）、フィリピン（サンチェスミラ市）の首長等が On-line で参加した。

意見交換後、今後、サシバの保護活動やサシバのフライウエイの環境をどう守っていくのかという「国際サシバサミット 2021 宮古島宣言」が採択された。

本稿では、このサシバサミットをとおして各地から発表された活動状況をもとにサシバの未来について考察を試みた。

１　遺跡の中のサシバ遺物

宮古でのサシバの出現はいつ頃だろうか。この問題に応えるのはなかなか厳しい。わからないというのが現状であるが、ここでは収集されたサシバ記録をたどってみたい。

上野村豊原にあるピンザアブ洞穴遺跡は約 25,000 年前の遺跡だと考えられている（沖縄県教育委員会、1985）。そこではノスリ、オジロワシ等タカ類の骨が出ている。しかし、サシバの骨は出土していない。ツズピスキアブは宮古島市立南小学校に隣接する大原公園内にある約 10,000 年前の洞窟遺跡である（山崎、2015）。そこではイノシシ、ヨシハタネズミ、ハタネズミ、ケナガネズミ等の動物骨が出土している（波木、2015，河村等、2015）。しかし、サシバの骨は出土していない。アラフ遺跡は 2800 年前～1900 年前、無土器期の遺跡である。ここではシャコガイ製貝斧、サメ歯有孔製品、当時の食料と考えられるチョウセンサザエ、サラサバテイの貝類、イノシシ等の骨などが多く出土している。しかし、ここでも、サシバの骨は出ていない（宮古諸島の文化財、2011、宮古島市教育委員会）今のところ、宮古島のどの遺跡からもサシバの骨は出ていないのである。

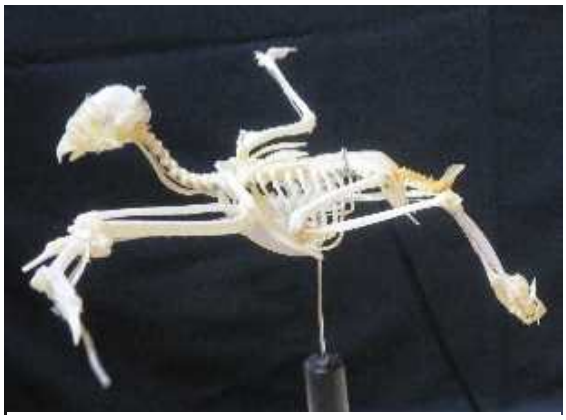

写真１　サシバの骨格標本全体像（宮古島市総合博物館収蔵）2022,10,３

写真２　サシバの骨格標本頭部（宮古島市総合博物館収蔵）2022,10,３

２　宮古諸島における動物遺物

宮古諸島は 150 万年前までは中国大陸と陸橋でつながっていた。しかし、何回かの地殻変動で、14,000～10,000 年前に現在の宮古諸島の原型が形作られた（大城、2019）。宮古諸島に人類が住み始めたのは何時なのだろうか。2,800～600 年前の無土器期遺跡（宮古島浦底遺跡）では貝類や魚類の遺物が多く出土している（山極海嗣、講演資料、2021）。しかし、人の定着は定かでない。

沖縄県の考古学の時期区分によると、グスク時代は 11 世紀後半から 16 世紀までを年代幅にしている。先史時代において、沖縄諸島と異なる文化圏を形成していた宮古・八重山諸島であるが、グスク時代になると遺跡内から沖縄諸島と共通した異物が出土することから、一定の人の往来が起こるようになる（久貝、2022）。

この頃には人の定着があったと考えられる。したがって、サシバと宮古の住民との関りは、11 世紀、以降になるのではないかと考えられる。

1477 年に与那国に漂流した朝鮮済州島民の記録、「朝鮮済州島人漂流史料」では宮古島の農耕作物として「稲、黍、粟、ベンムギ有り」と記されている（久貝、2022）。

15 世紀後半から 16 世紀前半の外間遺跡からはウシ、イノシシ、ブタの出土が多く、イヌ、ウマ、ウミガメ、ニワトリの出土は少ない。

３　宮古諸島におけるサシバの記録

日本では鎌倉時代（1192～1333）にはサシバという名前がでてくる。江戸時代（1603～1867）にはアオサシバ、アカサシバの名前が出てくる（Wikipedia、サシバ、八幡自然塾）。おそらくアオサシバとはメス、アカサシバとはオスだろうと推測される。

沖縄では中山伝信録（徐葆光、1721）に初めてサシバが記録された。そのあと、石垣島気候編（岩崎、1974）に科学的に記録された。

ネフスキー（1822 年、ロシアで生まれ、ペテルスブルグ大学、東洋語学部を卒業。外国人では初めての宮古研究者）は 1935 年 12 月 8 日、ソ連科学アカデミーの本学研究室で「宮古のフォークロア」と題する報告を行った（仲宗根、宮古研究、2006）。

ニコライ・A・ネフスキーは今からちょうど 100 年前（1922 年）に宮古を訪れ、宮古のアヤグや方言、祭祀等を調査研究した。宮古研究の礎を築いた最初の外国人学者でもある。そのネフスキーが友人宛に書いた手紙の中にサシバだと思われる記述がある。

「10 月には渡り鳥の鳶（トビ、宮古では飛来は少ない）の群れが宮古全体を占めます（ここでいう鳶とはサシバのことだろうと思われる）。子ども達は歌を歌いながら木々の上に特別なわなをしかけ歌で鳶（トビ）を呼び寄せます。捕獲した鳥は食料にされますが、別の鳥―沖縄（琉球本土）や日本―に去った者がいる家では鳶（トビ）を食料にすることは厳格なタブーになります。不在者に必ず不幸が訪れると言われているのです」（資料が語るネフスキー、2003 年 3 月 31 日発行　編者　生田美智子、発行　大阪外国語大学）。

宮古で一番古いツギャの著者確認記録は 1909（明治 42）年 10 月 26 日付の沖縄毎日新聞である。それには以下のように記されている。

「・・・宮古仮海岸に雑木を立て縄をかけ席を以て人の隠れ所を造りあり。不思議に考えこれを松永氏に尋ねしに彼は鷹の渡り鳥を捕獲する所なり。鷹は寒露の節来れば数百千里のうみを渡りて疲れ果て同島に中休みをなし他に行く。・・・」（平良市史第 10 巻資料編８、戦前新聞集成上、2003）。なお、いつ頃からツギャを使用

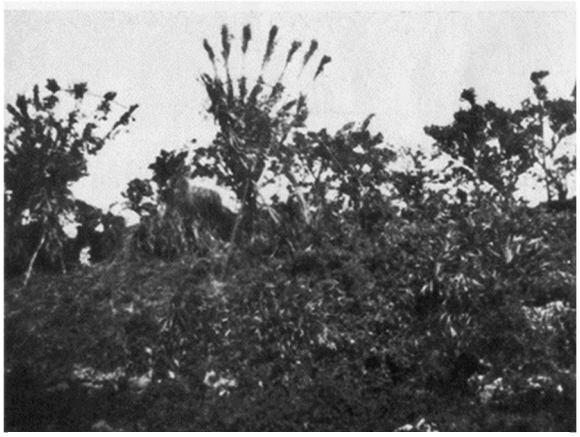

写真３　岡田（1938）より、下地地区のツギャ（捕獲装置）だと思われる（1920～30 年代）

写真５　1970 年代前半、本格的なツギャ（伊良部島）

写真４　1970 年代簡易ツギャ（伊良部島）

写真６　1970 年代前半、捕獲されたサシバ

したサシバの大量捕獲がなされたか記録がなくて分からないが、いろいろ、これまでの記録を勘案して考えると人頭税（1637～1903）の頃と深く関わっているように思える。

４　サシバと宮古島

１）宮古島市の誕生とサシバ

かつて、サシバが最も多く飛来する旧伊良部町ではサシバを町の鳥に指定しサシバ保護活動を進めてきた。

2005 年 10 月１日に旧平良市、旧伊良部町、旧城辺町、旧下地町、旧上野村の５市町村が合併して宮古島市が誕生し、新しく市の鳥にサシバを制定した。

２）サシバを通した交流

2017 年 10 月３日、サシバの繁殖地で知られる栃木県市貝町と中継地点で知られる宮古島市の間で「サシバを通した交流都市協定」が締結

された。

2018 年 10 月 16 日、日本自然保護協会主催の県民カレッジ､「宮古から世界に広がるサシバ保護」が開催された。

台湾ではサシバは毎年、建国記念日の 10 月 10 日前後に飛来するので縁起のいいめでたい鳥（国慶鳥）として国民に親しまれている。

2018 年 9 月、宮古島市と台湾・長榮大學が国際関係を推進する覚書を締結。同時に教育委員会内に「日本教育センター」を設置した。

2019 年 5 月 25 日―26 日、栃木県市貝町で第一回目の国際サシバサミットが開催された。そのサミットには台湾、フィリピンからも多くの研究者や保護活動を行っている皆さんが参加した。

2020 年 10 月 11 日、サシバをテーマに「千里の縁―サシバが結ぶ日台交流」と名打って宮古島市と台湾懇丁国家公園管理所を On-line で結んで交流会が開催された。

国際サシバサミット 2021 宮古島

＜開催趣旨＞

東アジア諸国に、海を越えて渡るタカ、サシバ。沖縄県宮古島は日本最大の渡りの中継地です。毎年 10 月になると多くのサシバがやってきます。古くからサシバと深いか関りを持ち「宮古のサシバ文化」として定着している宮古島。「宮古でサシバを知らない人はいない」と言われるように、多くの歌や民話に登場し、様々な場所にサシバのモニュメントや絵が描かれています。

サシバの繁殖地・中継地・越冬地が集う国際サシバサミット。第２回目は「宮古のサシバ文化」を世界に発信するとともに、世界各国が集まってサシバと私たち人間が暮らす自然環境の未来を考えます（国際サシバサミット宮古島大会実行委員会）。

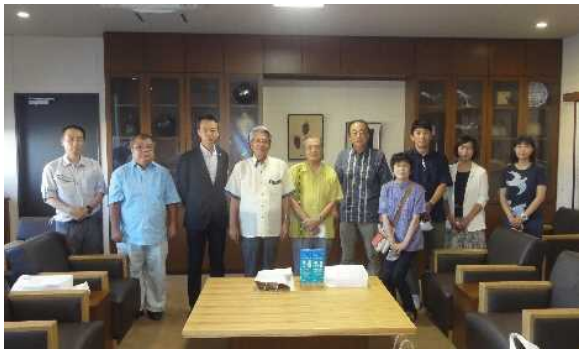

写真７　関係者で市長表敬

サミットプログラム

10 月 16 日（土）

カンファレンスとポスター発表

１）オープニングセレモニー

とうがにあやぐ（宮古島市環境衛生課職員有志）

２）Presentation about Activity & Research（活動・研究発表）

宮古のサシバ文化（台湾・長榮大學特別招聘教授：久貝勝盛）

写真８　オープニングセレモニー

シンポジウム

1）開会挨拶
座喜味一幸（宮古島市市長）
2）オープニングセレモニー
「宮古島　サシバの渡り」(劇団シンデレラ)
3）基調講演
「サシバも人も、地域も元気に一市貝町・サシバの里づくり」(遠藤孝一)
4）各地からの活動報告（台湾/フィリピン/奄美大島・宇検村/宮古島市）
5）首長サミット（フィリピン・サンチェス・ミラ市/台湾・屏東県/奄美大島・宇検村/市貝町/宮古島市）
6）国際サシバサミット 2021 宮古島宣言

Student Summit

1）オープニング
島番鷹キンミー(結の橋学園　伊良部島小学校)
2）子供たちの活動（台湾・墾丁国家公園管理本部、フィリピン・サンチェス・ミラ市、阿室小中学校、崎原小中学校、小貝小学校、結の橋伊良部島小学校）

サシバ俳句コンテスト結果発表

オン・ラインお絵描き教室

サシバ保護の宣言

ポスター発表
閉会挨拶（宮古島市副市長・アジア猛禽類ネットワーク会長）

Opening Address（開会挨拶）･･･座喜味幸一宮古島市市長

サシバは宮古島市にとって歴史的、文化的にも欠かせない存在であり、多くの歌や民話にも登場します。宮古島へは、秋の風物詩として毎年、寒露の頃に、数万羽が渡りの中継地としてやってきます。過去にはサシバを捕獲していた時期もありましたが、沖縄の本土復帰後、保護鳥となり、各所でサシバ保護活動に関する取り組みが始まりました。地域を巻き込んだ長年の活動により、市民の保護意識が定着し、現在ではサシバの密猟はゼロになりました。

サシバは渡り鳥であります。サシバサミットをとおして絶滅危惧種に指定されているこのサシバについて、繁殖地・中継地・越冬地が共にサシバ保護、サシバの生息する自然環境の保全について共有し、今後の取り組みの推進につなげていただくことを期待しております。

写真９　開会挨拶

Presentation about Activity & Research （活動・研究発表）

宮古のサシバ文化：久貝勝盛（台湾・長榮大學特別招聘教授）

サシバのシーズン中、子ども達にはペットとしてサシバが与えられた。子ども達はサシバの脚にヒモをつけ、その先端に履き古した下駄を

つけて飛ばし、どこまで飛べるか競走した。宮古諸島でサシバが一番多く飛来するのは伊良部島と下地島である。この島にはサシバに関する興味深い古謡がある。私はこの古謡を含め、地域住民との関りを「宮古のサシバ文化」と呼んでいる。

写真 10　与那城美和（古謡歌い手）

Local old song of the Grey-faced Buzzard. It reads:

1　くがつん　まいふう　タカがま　どんま　しつつあ　しっしど　とびまいふう
（旧暦 9 月に飛来するサシバは毎年季節を知って飛んでくるよ）
Every September of the lunar calendar, the Grey-faced Buzzards recognize the season and fly to our islands.

2　くがつん　まいふう　タカがま　どんま　すまぬばん　むらぬばんちど　ぬくいあむぬ　どうたまい　すまぬばんちど　ぬくらじてい
（旧暦 9 月に飛来するサシバは島や村を守るために居残る　私たちも島や村を守ろために残って頑張ろう）
The Grey-faced Buzzards which fly to our Islands in September of the lunar calendar stay to protect our islands. So, let’s also do our best to protect our islands.

3　しつの　といがまどんま　むどりっち　みいらいすが　どうぬ　ふっふぁ　んみやのうちが　みらいんが
（寒露になると　サシバは必ず見られるが死んだわが子はどうしてもどってこないのか）
（仲宗根玄信・千代、村吉蒲五郎、1979）
Every migratory season, we can see the Grey-faced Buzzards. But, my child, who died, will never appear (Mr.Nakasone and Mr.Kamagoro Murayoshi, 1979)

写真 11　サシバと子ども達（George H Kerr 1960s）

写真 12　サシバの放鳥（慶田城健仁）

Keynote Lecture（基調講演）

サシバも人も地域も元気に：遠藤孝一（日本野鳥の会理事長、オオタカ保護基金代表、サシバの里協議会事務局長）

それぞれの地域には、そこの生態系に応じた多様な生き物が生息する。近年、その生きものをシンボルに地域振興と生態系の保全を両立させながら、持続可能なまちづくりを進める自治体が増えており、サシバでもそのような取り組みが始まりつつある。ここでは、サシバを町のシンボルとして位置づけ、自然共生型のまちづくりに取り組んでいる栃木県市貝町の事例を紹介する。

市貝町は、北関東の栃木県東部に位置する面積 64 平方キロ、人口１万１千人の小さな町だ。里地里山が広がるこの町がサシバの繁殖地として知られるようになったのは 1990 年の後半から 2000 年代前半。オオタカ保護基金の調査によると、2002 年には 16 平方キロで 24 つがいの生息が確認されており、この密度は日本一と言われる。

写真 13　特別栽培米「サシバのふるさと」の販売

Conservation Activities of the Grey-faced Buzzard in Each place(各地からの活動報告)

＜台湾＞

サシバフロント（トップラー気象レーダーを用いたサシバの渡り経路に関する研究）

Hsin-Chih Lai(Department of Green Energy and Environmental Resources, Chang Jung Christian University)

Chen-Jeih Pan(Department of Space Science & Engineering, National Central University)

Vi-Jung Tsai(Wild Bird Society of Ping-Tung)

Jen-Hsin Teng (Research Development Center, Central Weather Bureau)

写真 14　台湾長榮大學、Hsin-Chih Lai（教授）

通常、春の猛禽類はたいてい海からやってくるため、バードウオッチャーが猛禽類の追跡を楽しめるかどうかは「運」の問題です。秋とは異なり、春には猛禽類は台湾を離れて飛翔を続ける前に、ケンティン地区に一晩滞在します。そのため、人々は夕方には猛禽類の上陸と同様に朝には飛び立ちの姿を見て楽しむことができます。KTNP（懇丁国立公園）の最も経験豊富な役員でさえ、春に猛禽類をいつどこで見られるのかは保証できません。レーダーの助けにより、春に猛禽類がいつどこへおりてくるのかをより容易に知ることができます。一方、私たちは猛禽類が秋にどこに向けて出発しているかを知っています。

＜The Philippines＞

Country Report on Conservation of Grey-faced Buzzard During the Time of Pandemic（パンデミック時におけるサシバ保護活動に関する報告）

Alex M. Tiongco (Raptor Watch Network Philippines)

Teresa Coevero (Raptor Watch Network Philippines)

写真 15

都市封鎖と渡航制限の中、会議や集会が禁止にもかかわらず、このパンデミックが人々の心にもたらした恐ろしい恐怖を通して、RNP（ラプターウオッチネットワーク―フィリピン）の調査地域での猛禽類の調査及び保護活動は歩みを続けています。猛禽類を保護することの莫大な価値に理解を示し始めた。猛禽類が飛来する地域の人々、フィリピン政府、自治体と行政機関によって、彼らの使命と伝承の一部として取り組みが進められています。

写真 16

＜Japan＞
各地からの活動報告：宇検村
宇検村で越冬するサシバに関する報告
与名正三（サシバ愛護会関西～奄美ネットワーク、宇検役場企画観光課）

宇検村に留まり越冬するサシバは約 300 羽で、１羽ずつ半径 200 メートルから 300 メートルのテリトリーを確保し、様々な獲物を捕らえながら翌年の４月上旬まで留まります。獲物の種類はセミやカマキリ等の昆虫が多く、特に飛来直後は活発に樹上を飛び回っているセミやカマキリを空中で捕獲します。季節や天候の変化に合わせて捕獲する獲物も変化します。

10 月、11 月はカマキリやバッタが多く、獲物の少ない 12 月、１月はベンケイガニ、ムカデ、カタツムリ等を捕食します。村内に植栽されている緋寒桜が咲き始める２月上旬になると獲物の種類も多くなりトカゲ、ヘビ、小鳥等も捕食するようになります。

越冬中は一定のテリトリーを確保しながら生活しなければなりません。常に隣接するサシバに気を配り、鳴きながらテリトリーの上空を旋回したり、テリトリー内に侵入して来る相手に体を張って攻撃し、追い払います。各個体の写真撮影による個体識別に拠れば、宇検村での越冬における約 50％の個体が前年に渡来した同じ場所でテリトリーを構えることが確認できました。

宮古島市の 48 年間の飛来数調査
仲地邦博（宮古野鳥の会　会長）

サシバの時間別の飛来数を 2005 年から 2020 年の 16 年の平均でみると、16 時から 17 時が 3,996 羽と最も多く、17 時から 18 時の 3,494 羽が続く。さてサシバの平均飛行速度は約 40 km/時と言われている。朝の飛び出しを６時とすると 16 時～18 時に到着したサシバの飛行時間は 10～12 時間で飛行距離は 440 km前後となり沖縄本島北部から出発した群れだと考えられる。サシバは飛べるだけ飛んで夕暮れ時に到着した宮古諸島（伊良部島と下地島を中心に）に降りて、一晩休息し、次の目的地に向かって飛び立っていくと考えられる。早い時間に降りてくるサシバは悪天候で体力を消耗したり、宮古諸島より南方の天気が崩れているのを感知した群れであろう。

サシバの飛来数の変化を年度別に考察する。1970 年代の平均は 36,143 羽、1980 年代は 36,320 羽、1990 年代は 22,590 羽、2000 年代は 16,833 羽、2010 年代は 14,464 羽と減少している。1990 年代から減少が目立ち、2010 年代になると 10,000 羽を下回った年が４回もある（サミット冊子、2021）。

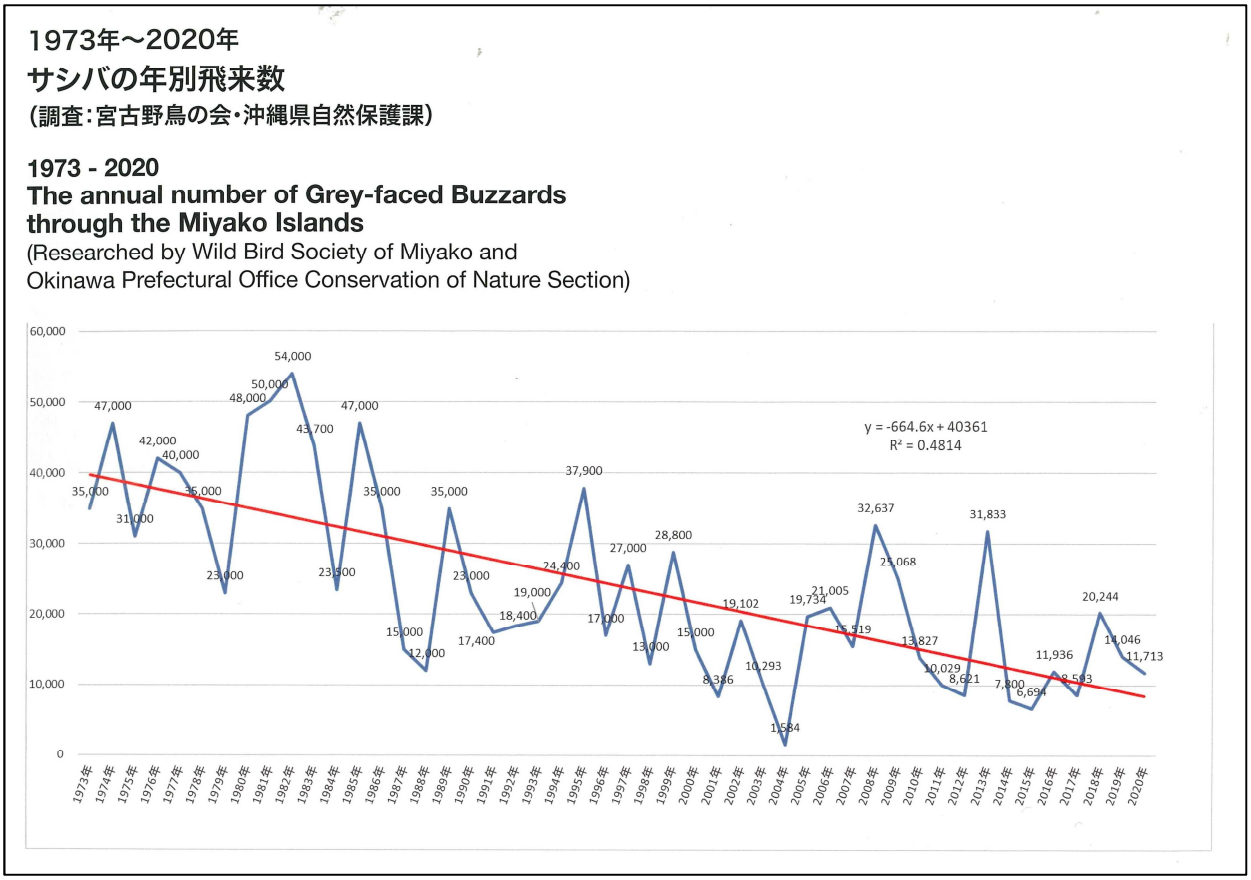

図１　仲地、2021　サミット冊子

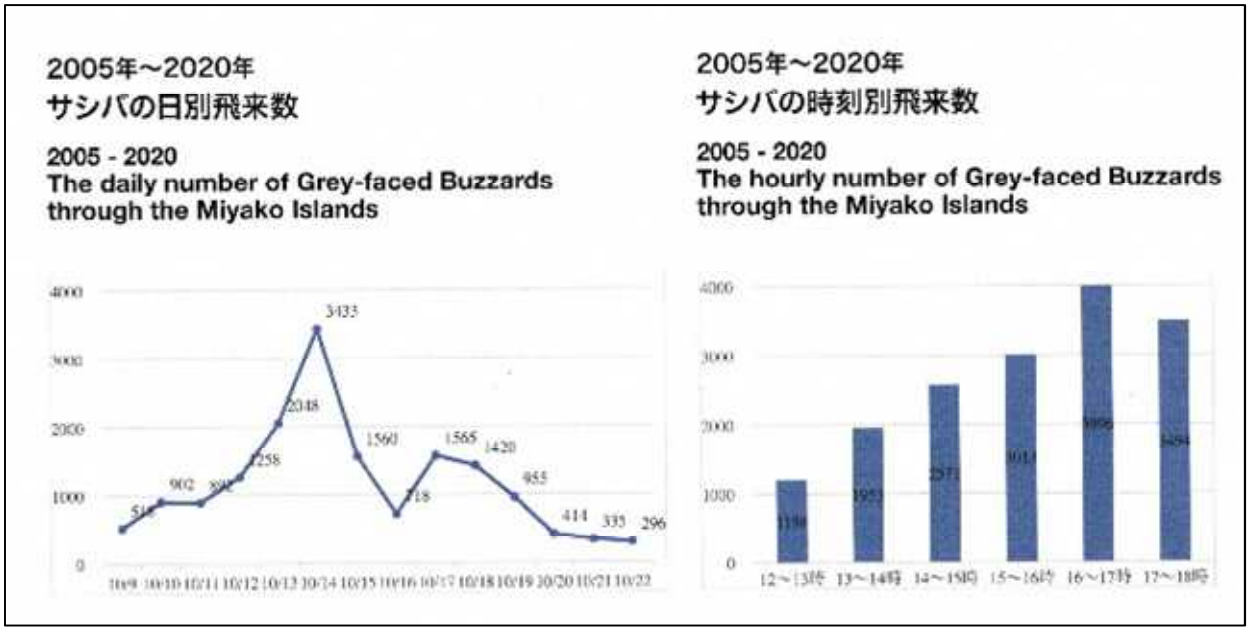

図２　仲地、2021　サミット冊子

Messages from the Mayors
市長からのメッセージ

サシバを救おう、サシバを守ろう
Aseala Sacramed (The Mayor of Sanchez Mira, サンチェス・ミラ市　市長)

サンチェス・ミラ市はサシバまたはフィリピン語で“SAWI”の中継地（ねぐら）として知られています。これらの渡り鳥が絶滅の危機にあると懸念されてから、地方自治体の議会を通して条例第 1 条 2006 が制定されました。「フィリピン、カガヤン、サンチェス・ミラ市の自治体内で “SAWI” または渡り鳥などを密猟、捕獲、持ち込んで売買する事を禁止する」この条例は、サシバ狩猟反対のキャンペーン活動の立ち上げに役立ちました。

The Magistrate of Pingtung County (潘孟安 Pan Man-An,台湾・屏東県長)

この度は、国際サシバサミットに参加できることを光栄に思います。毎年サシバの飛来によって皆様が集まれる事をうれしく思うとともに、この「サシバのご縁」によってもたらされる台湾と屏東の環境保全、まちづくり、環境教育及び渡り鳥観察事業に感謝致します。「サシバ友好」の積み重ねによって、屏東県政府はサシバが飛来する生息地の保護を推進し、行政と民間の協力を得て「まちの渡り鳥観察ガイド」活動を行い、渡り鳥が安心して生息出来るような観察のルートを設けてきました。これらの台湾の取り組みを海外の友人達にも共有したいと思います。

入野正明（市貝町・町長）

日本国の首都東京から 100 kmほど北方にある人口一万人余りの小さな町、市貝町で 2019 年第一回国際サシバサミットが開催されました。サミット宣言では、参加団体の中で唯一サシバの繁殖地であることから、個体と生態系を保全するミッションを課せられました。しかし、コロナ禍のためサシバのインキュベーターである谷津田の再生は、耕作放棄されたまま成功していません。

元山公知（奄美大島、宇検村・村長）

本村は、リアス式の焼内（やきうち）湾沿いに南西諸島特有の常緑照葉樹の山々が広がり、ここに縄張りを持つ数百羽のサシバが、毎年決まった時期に飛来し、冬の訪れを知らせてくれます。

サシバは自然環境の豊かさを示す指標と言われる猛禽類であることから、宇検村で越冬する全ての個体の存在が如何に重要であるか、そして、サシバの保護活動に起因する環境保全と国を超えた交流への発展性の訴求力に、大きな可能性と責務を感じ得ました。

サシバを通した国境なき保護活動が、我々の村に大きな勇気と未来への希望、そして結束力の開花へ繋いてくれるものと信じております。

Children’s Activities
子供たちの活動

台湾・懇丁国家公園管理本部

長榮大學を仲介して、懇丁国家公園管理局と宮古島市が提携し、サシバを環境教育におけるシンボル的「タカ」として制定。毎年、南へ北へと渡りを行うサシバは、環境保全の成果や期待をもたらすだけでなく、日本と台湾における友好の架け橋となっている。自然環境と人間社会の調和を映し出すサシバ文化を共有し、環境教育や種の保全にも努めている。特筆すべきは、人と自然は地球に生きる共同生命体であり、サシバを通じて共に、「生命間のコミュニティ」を

写真 17　活動風景（サミット冊子、2021）

構築していること。私たちは自然に敬意を払い、従い、守り抜くと同時に、協力しながら生物多様性を維持し、人と自然の共生を促進しなければならない。環境を守ることは「環境」から「生態」へ、「保護」から「持続可能性」へと拡大している。友好の架け橋は世界の隅々へとかかるだろう。

フィリピン　サンチェス・ミラ市
＜Agta Cultural Dance(アグタ族の伝統舞踊)＞

サンチェス・ミラは新旧イロカノ人によるさまざまな文化が交差する町です。フィリピンの言語グループであるネグリト民族の中でも北ルソン、特にカガヤンのネグリトたちは彼らをアグタ族と呼んでいました。

この先住民族は、一連の移住の後、調和のとれた生活を送っていました。定住期には、他の部族と同じように畑で作物を育てたり、魚を採ったり、狩りをしたりしますが、伝統的なアグタ族は、初期の移住から定住までの間、ダンスが職業活動に関わっているという迷信を信じていました。

写真 18　アグタ族の統舞踊（サミット冊、2021）

宇検村立　阿室小中学校
＜奄美の自然に学び、生き物と暮らす＞

写真 19　活動風景（サミット冊子、2021）

私たち阿室校の小中学生 20 名は、奄美の自然や生き物について学び、私たちのできる環境学習活動に取り組んでいます。校内にある田んぼでの稲作学習は、20 年以上の歴史があり、地域の方々との協働で、できる限り昔ながらの奄美の稲作法にこだわっています。

また、学校の横を流れる阿室川の自然観察・生き物調査やゴミ拾い、海岸漂着物調べを行い、故郷奄美～宇検村、阿室校区の自然を体感し、保全に微力ながら取り組んでいます。

奄美市立　崎原小中学校
＜崎原小中学校で越冬するサシバ観察を通して＞

「去年と今年のサシバは同じなの？」という友だちの素朴な疑問が本校でサシバの個体識別を始めたきっかけでした。

私たちは、崎原小中学校で撮影したサシバの他の顔写真も分析してみました。すると、額の部分の特徴的な模様やくせ毛はほとんどの写真にも共通してあてはまることがわかってきました。このことから同じサシバが崎原に戻ってきて越冬しているのではないかと考えました。

市貝町立　小貝小学校
＜豊かな自然環境を生かした「ふるさと学習」＞

写真 20　活動風景（サミット冊子、2021）

小貝小学校ではサシバの繁殖地という豊かな自然環境を生かし､｢ふるさとに対する愛着や誇りをもつことができる」ことを目標とした「ふるさと学習」を展開しています。全校児童による活動としては、「探鳥会」「クリーン活動」などを伝統的に実施しています。今年度の「探鳥会」ではサシバを観察することができ、児童の自然環境に対する関心を高めることができました。また、児童会活動として「クリーン活動」を実施し、地域の環境美化に努めています。

サシバについては、特に５年生の総合的な学習の時間で「サシバの里を守ろう」を年間テーマに設定し、重点的に活動しています。サシバやサシバの生態を支える里山の環境などについて体験活動を取り入れながら追求し、学習の成果について宮古島市立伊良部島小学校５年生とリモートで交流会を行い学びを深めています。

宮古島市立　結の橋学園　伊良部島小学校
＜ふるさとの鳥、サシバを守るための総合学習＞

写真 21　活動風景（サミット冊子、2021）

伊良部島小では、総合的な学習の時間等で主に５年生が中心となって、サシバの保護に関連する活動を行っています。

４月のオリエンテーションで、サシバについて知っていることを共有し、そこから、年間のテーマを決め､解決するためにどうするかなど、計画を立てます｡そして､テーマ達成のために、調べ学習やクリーン活動、そして、学んだことを外部に発信するための成果物づくりなどを行っています

Special Program 特別プログラム

＜ミュージカル　「宮古島　サシバの渡り」　劇団シンデレラ（フローレス　ともこ）＞

「夢と希望と冒険と自然と共に生きる」をテーマに大人から子供まで楽しめるファミリーミュージカルを作り、日本全国、アジアをまわって生き物たちの声を届けています。サシバとの出会いは、愛知県豊田市の「サシバの住める森づくり」の出会いから始まり、毎回劇団シンデレラの物語に出演します。

何万キロも渡りをするサシバに勇気をもらったり、昔は重要な栄養としておいしくいただいたり、サシバは人間にとって身近でとても大切な存在でした。

「絶滅危惧種なんていやだ」「毎年ここに渡ってきていいの？」

サシバ達を守るには国を超えて協力することが必要です。サシバがあなたの町に来年も再来年も飛んできますように。

写真 22　劇団シンデレラの演技

On-line, お絵描教室（岡田宗徳：野生動物画家、アメリカ動物芸術家協会認定会員）
＜サシバを一緒に描いてみよう！＞

岡田氏は、日本で絶滅の恐れのある動物を中心に絵を描き続け、野生動物保護・生息地自然保全活動に力を入れる。各種チャリテイー個展や絵画教室の開催、海外の展示会へも出展するなど精力的に活動を続けている。海外入選歴あり。

写真 23　お絵描きに参加した子供たち

Poster Exhibitions　（ポスター発表）

01. 台湾：台湾猛禽研究会（Tsai Yi Hua）
　台湾南部の懇丁国家公園における秋の渡り鳥であるサシバのモニタリング調査結果として、総数、季節的な渡りのタイミングの変化について紹介する。

02. フィリピン：Nueva Vizcaya State University (Jayson Caranza)
　石灰岩に覆われたカピサン洞窟の森林は、鳥類の多様性が高く、渡りをする猛禽類が春にねぐらとして利用しています。鳥類の重要な生息地として回復・保護する必要があります。

03. フィリピン：Environmental Conservation and Protection Center Sarangani Province (Roy Mejorada)
　フィリピンのサランガニ州グランにあるタルタック山の森林再生プログラムは、秋の渡りの際に、サシバやその他の渡りをする猛禽類のねぐらを保護・保全することを目的としています。

04. フィリピン: Northwestern University, Laoag City, the Philippines (Michael Agbayani Calaramo)

サシバ (Sawi) のフィリピン・ルソン島北西部での 5 年間の春季モニタリング調査結果を紹介する。

05. Japanese Society for Preservation of Birds, Raptor watch Network Philippines, Asian Raptor Research and conservation Network (Takashi Fujii, Satomi Matsunaga, Yuki Yoshida, Alex Tiongco, Marts Cervero, Toru Yamazaki)

フィリピンのルソン島中部、ヌエヴァ・ヴィスカヤ州では、サシバの伝統的な狩猟が今も行われている。私たちは、その狩猟をやめさせるため、政府やコミュニティ、学校と協力して活動を開始しました。ここではその取り組みを紹介します。

06. オオタカ基金（遠藤隼、遠藤孝一）

サシバの里自然学校は、里山の保全と利用を目的に 2016 年にオオタカ保護基金を市貝町内に開設した。古民家と５ヘクタールの雑木林、谷津田で、生きもの育む農業や様々な体験活動を行っている。ここでの活動を紹介する。

07. 公益財団法人　日本野鳥の会（斎藤充、川島賢治、大畑孝二）

日本野鳥の会が指定管理者として運営を担っている豊田市自然観察の森では、サシバを保全目標種とした里山保全事業「サシバのすめる森づくり」を 2005 年から行ってきました。そして 2020 年、事業地内で 16 年ぶりに 1 つがいの営巣を確認しました。

08. 豊田自動車株式会社（伴邦教、村山浩二郎）

トヨタ自動車新研究開発施設事業において、採餌環境の整備、森林整備、谷津田の管理等のサシバの生息環境を整備し、立ち入制限や目隠しフェンスのお設置などの営巣時の工事配慮を行い、サシバとの共存を図っている。

09. NPO 法人　三浦半島生物多様性保全（天白牧夫）

神奈川県三浦半島におけるサシバの繁殖は、谷戸田の激減により、1997 年を最後に途絶えている。耕地放棄された谷戸の湿地環境を市民団体と行政が連携して再生し、サシバの繁殖再開と、里山環境の魅力の向上による地域活性化を目指している。

10. 宇検島・サシバ愛護会　関西～奄美ネットワーク（与名正三）

I observed a Pair of Parenting Grey-faced Buzzards for 7 years in Kyotanabe City of Southern Kyoto.

11. 宮古野鳥の会（仲地邦博）

1962 年～2006 年までの琉球新報（一部、沖縄タイムス）を調べ、サシバに関連する新聞記事を一覧にした。宮古の住民とサシバ関係の変遷を考察する。

12. 公益財団法人日本自然保護協会（出島誠一）

日本のサシバの中継地・越冬地として重要性の高い、宮古島市伊良部・下地島で「サシバの森」づくりを進めています。

13. 公益財団法人日本自然保護協会（出島誠一）

サシバの繁殖地・中継地・越冬地の保全を進めるために、市貝町のサシバ繁殖地のお米を原材料とした琉球泡盛「寒露の渡り」

が、宮古島市伊良部島の酒造会社「宮の華」によって造られました。関係者の思い等を紹介します。

写真 24　関係者でサミットご苦労さん会（2001, 10, 17）

写真 25　市貝町のお米で作った泡盛（寒露の渡り、宮の華酒造）

5　サミット後のサシバ関連行事

サミット関連行事として宮古島市総合博物館では企画展「あなたの知らないサシバの世界」を開催した（2022, 8, 19～10, 16）。サシバと関わった長い歴史の中で培われたサシバ文化をメインに紹介した。同時にサシバの骨格標本、成鳥・幼鳥のはく製、そして、かつて、来間島でごく普通に作られ利用されていたサシバ捕獲小屋（ツギャ、スギャ）のミニチュアも展示され参観者に臨場感を与えた。

写真 26　サシバ展示会ポスター

写真 27　サシバ飛来数調査 50th（2022、10, 16）

一方、宮古島市と日本自然保護協会は宮古野鳥の会と沖縄県自然保護が 50 年間継続したサシバ飛来調査 50 年を記念して「サシバカウント 50 年」記念セレモニーを開催した（2022, 10, 16）。

記念講演では岩手大学講師の東淳樹氏が「サシバにとって宮古島とは一子育てや渡りの暮らしぶりから」と題して講演した。東氏は「サシバによって世界の人たちがつながることができた。現在、数を減らしているが、繁殖地、中継地、越冬地が協力して保護に努めれば数は回復する」と訴えた。

動物画家の岡田宗徳氏はサシバカウント 50 年を記念してサシバの原画を宮古島市長に贈呈

写真 28　宮古島市伊良部島サシバ飛来数調査 50th 記念に市に贈呈されたサシバ原画（岡田宗徳氏）

写真 29　サシバの森づくり植樹

した（2022, 10, 21）。一方、日本自然保護協会（亀山章理事長）は伊良部島の平成の森公園野球場そばの市有地（約 900 平方メートル）で植樹とゴミ拾い行った。サシバが羽を休める森づくり目指すもので市や宮古野鳥の会、宮古森林組合、三菱地所などから多くのボランテイアが参加した（2022, 10, 22）。

宮古島ジュニア俳句育成会（伊志嶺亮会長）は伊良部島でサシバ俳句吟行会を開催した（2022, 10, 16）。子どもから高齢者まで多くの俳句愛好者が参加した。俳誌「円虹」の主宰者山田佳乃氏は「俳句は当たり前の日常を見つめなおすことができる。体感し感動したことを五七五にして」と呼び掛けた。

「サシバみに伊良部にきたよ会いたいな」（長崎太亮、幼稚園）。「あきのそらサシバこないよまちぼうけ」（長崎れな、南小 2 年）。「サシバ来るポイントの地へ双眼鏡」（一般、砂川純一）。

写真 30　サシバ俳句吟行会

結の橋学園では恒例のサシバ保護パレードを行った（2022, 10, 7）。

このように国際サシバサミットを機にサシバ保護の機運は大きなうねりとなって宮古全域に広まった。同時に、島を挙げて取り組んでいる地道なサシバ保護活動を全世界へ発信することができた。大変、うれしいことである。改めて関係者の皆様に心から感謝したい。

写真 31　結の橋学園サシバ保護パレード出発式

まとめ

① これまで、宮古の遺跡からサシバの骨は見つかっていない。

② ピンザアブ洞穴遺跡（約 25, 000 年前の遺跡）からノスリ、オジロワシ等の骨は出ているがサシバの骨は出ていない（沖縄県教育委員会、1985）。

③ 宮古でのサシバの出現は約 10, 000 年以降か。

④ 日本ではサシバの名前が出てくるのは鎌倉時代（1192～1333）。

⑤ 江戸時代（1603～1868）にはアオサシバ、ア

カサシバの名前が出てくる。アオサシバとはメス、アカサシバとはオスのことだと考えられる。

⑥　沖縄では中山伝信録（徐葆光、1721）に初めてサシバの記録が出てくる。

⑦　科学的に記録されたのは石垣島気候編（岩崎爾、1974）である。

⑧　宮古での一番古いサシバ捕獲装置（方言名：ツギャ）の記録は 1909 年（明治 42 年）10 月 26 日付の沖縄毎日新聞である（平良市史第 10 巻資料編８、戦前新聞集成上、2003）。

⑨　ツギャの古い写真は 1920～30 年代、下地地区と思われる写真である（岡田、1938）。

⑩　ツギャによるサシバの大量捕獲はいつ頃から行われていたか不明だが人頭税（1637～1903）の頃と深く関わっていたのかもしれない。

⑪　繁殖地・中継地・越冬地が集いサシバの未来について考える第一回国際サシバサミットはサシバの繁殖地である栃木県市貝町で開催された。

⑫　第二回国際サシバサミットは中継地点で知られる宮古島市で 2022 年 10 月 16～17 日、コロナ禍の中、オン・ラインで開催された。

⑬　海外からの参加はフィリピンと台湾の 2 カ国であった。

⑭　参加国（フイリピン、台湾）や参加地域（栃木県市貝町、奄美大島宇検村、宮古島市）ではユニークで活発な保護活動が行われている。

⑮　フィリピンのサンチェス・ミラ市ではサシバを密猟から救い、サシバを守ろうという機運が高まっている。

⑯　台湾・屏東県ではサシバが飛来する休息地を行政と民間の協力で保護している。サシバを中心に環境保全、環境教育、渡り鳥観察事業を推進している。モットーにしているのが繁殖地、中継地、越冬地を結んだ「千里の縁、サシバが結ぶ日台交流」である。台湾･屏東県にある長榮大學では 2021 年、2022 年にそれぞれ、宮古島市のサシバ研究者、久貝、フィリピンのサシバ保護活動家の Alex さんを講師に On-line 講演講座を実施した。

⑰　宇検村立阿室小中学校ではサシバを中心に奄美の自然や生き物について学び、私たちのできる環境活動学習に取り組んでいる。

⑱　宮古島市立結の橋学園　伊良部島小学校では５年生を中心にサシバ保護活動を行っている。

⑲　劇団シンデレラはミュージカル「宮古島サシバの渡り」で「サシバ達を守るには国を超えて協力することが必要です。サシバがあなたの町に来年も再来年も飛んできますように」と締めくくった。

⑳　このサシバサミットに参加されたフィリピン、台湾、宮古島市、奄美大島からの活動内容は「サシバの未来は明るい」というメッセージを全世界に発信する切掛けになった。

㉑　宮古島市総合博物館がコロナ禍で 2 年ほど延期していた夏休み特別企画展「あなたの知らないサシバの世界」を開催し大好評を博した（2022、8,19～10,16）。この企画展では宮古島市市鳥「サシバ」にスポットライトがあてられ観光客にも喜ばれた。

㉒　2022 年度愛鳥週間野生生物保護功労表彰で伊良部島小学校・中学校が文部科学大臣賞を受賞し、サシバの存在価値を高めた。

㉓　2022 年 10 月 16 日には宮古島市がサシバモニタリング 50 年を記念して講演会を開催。大盛況であった。

㉔　サシバ保護に精力的に関わっている日本自然保護協会が主催するサシバ俳句コンテ

ストを通して子どもから大人までサシバに深く関心をもつようになった。

㉕ 国際サシバサミットを機に開催された数々のイベントで宮古のサシバ文化は保護活動も含めますます全世界に知れわたるようになった。

謝辞

この論文を書くにあたり下記の団体、個人にお世話になった。団体名、個人の名前を記してお礼に代えたい。

宮古島市、宮古島市教育委員会、宮古島市総合博物館、国際サシバサミット宮古島大会実行委員会、公益財団法人日本自然保護協会、宮古野鳥の会、アジア猛禽類ネットワーク、公益財団法人日本鳥類保護連盟、公益財団法人日本野鳥の会、宮古島市立結の橋学園伊良部島小学校、日本自然保護協会生物多様性保全部長出島誠一氏、宮古島市史編纂資料室佐藤宣子氏。

参考文献

① 国際サシバサミット 2019 市貝
② 国際サシバサミット 2021 宮古島
③ 沖縄県教育委員会、1985、ピンザアブ
④ 山崎真治、2015、ツヅピスキアブ洞窟出土の石器、アラフ遺跡・ツヅピスキアブ・友利元島遺跡、宮古島市教育委員会
⑤ 波木基真、2015、第 3 章第 4 節脊椎動物遺体、アラフ遺跡・ツヅピスキアブ・友利元島遺跡、宮古島教育委員会
⑥ 河村愛、河村善也、2015、第 3 章第 4 節脊椎動物遺体、アラフ遺跡・ツヅピスキアブ・友利元島遺跡、宮古島教育委員
⑦ 大城逸郎、2019、第一章　地形・地質、宮古島市史第 3 巻自然編代 1 部(本編)、宮古の自然、宮古島市教育委員会
⑧ 山極海嗣、2021、旧石器時代以降の宮古島の人類史における研究展望～宮古島ツヅピスキアブ洞穴調査に向けて～、講演資料
⑨ 久貝弥嗣、2022、第 2 章自然の利用、第 2 節遺跡にみる自然、宮古島市史第 3 巻　自然編 Ⅱ部　自然とひと、宮古島市教育委員会
⑩ Wikipedia,サシバ、八幡自然塾
⑪ 徐葆光、1721、中山伝信録
⑫ 岩崎卓爾、1974、石垣島気候編
⑬ 1909（明治 42）年 10 月 26 日付、沖縄毎日新聞、平良市史第 10 巻資料編８，戦前新聞集成上、2003
⑭ 岡田彌一郎、1938、沖縄島の概要、BIOGEOGRAPHICA, pp9
⑮ 久貝勝盛、宮古のサシバ文化、2021、国際サシバサミット
⑯ 生田美智子編者　資料が語るネフスキー、2003 年 3 月 31 日、大阪外国語大学発行 pp188―191、（株）アイジイ